
LOVELESS × True Love

桜希 澪乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVELESS x True Love

【Nコード】

N9500E

【作者名】

桜希 澪乃

【あらすじ】

とあるロックアーティストと一夜の関係を結ぶことが出来た私。それはとても嬉しいことのはずなのに、心はどんどん冷めていく。体は満たされも心は満たされない。その辛さを胸に秘め、それでも私は関係を続けていく。そしていずれ訪れる終焉の幕引きを、みずからの手で引く……。

PROLOGUE (前書き)

18禁指定はしておりませんが、一部性描写を含みます。

(露骨な性描写はありません)

それをご承知の上でご覧ください。宜しくお願いいたします。

PROLOGUE

上半身を起こし、紫煙を燻らせる彼の背中を見つめながら、私は床に脱ぎ捨てた服を身に纏う。

彼は窓の外の景色をぼんやりと眺めている。それを私は、彼の背中越しに眺める。

外はまだ暗い。

夜明けまではまだ間があるのは、部屋の光を反射して鏡のようになった窓を見れば一目瞭然だった。窓硝子は、物憂げな表情の彼を映し込む。

……身支度を整え、鏡と化した窓硝子を使って髪を軽く手櫛で直すと振り向きもしない彼に向かって、硝子越しに微笑みの表情を作る。

「じゃ」

彼は、何も言わない。

ただ、残り少なくなった煙草を灰皿に押し付けた。

返答を期待することなく、私はコートを羽織ると彼の部屋を後にした。

マンションのエントランスを出ると、外は身を刺すほどの冷気。身震いして私は歩き出す。

彼の温もりは、歩き始めた瞬間にすぐに消え失せた。むしろ寒さはいや増した。

身を縮め首を竦ませて歩きながら、私は泣いた。

涙は熱く、しかし頬を伝うと氷のように冷たくなって、ますます体は冷え固まっていくようだった。

私は、体の中に融けない氷を持っている。

それは少しずつ大きくなり、融けた氷は涙となって瞳から溢れ出す。しかし零れた涙はまた、氷となって体内に凝る。

その、繰り返し。

負の螺旋を描きつつも私は「そこ」から抜け出せず…いや、抜け出すつもりもなく、虚しさを募らせるだけだと分かっている。尚、彼との情事を繰り返す。

肌を合わせても温もりも得られず。

体を重ねても、ココロを重ねることもできないまま。

それでも。

私は彼を求める。

彼が私を求めているなくても。

ホームに滑り込んできた電車は、ゆっくりと減速をする。

終電間近で僅かに混雑した車内に乗り込み、閉まるドアに寄りかかった。

MP3をコートのポケットから取り出して、イヤホンをつける。

再生ボタンを押すと、短い前奏の後、聞き慣れた「声」が耳に届いた。

彼の声。彼の歌声。

甘く、切なく、強く。

彼は歌う。

その歌声を聴き、私はまた少し泣いた。

私が彼と出逢ったのは、殆ど偶然、もしくは成り行きのことだった。

厳密に言つとそれは誤りで、実は彼と出逢うべく画策したのは紛れもない事実だけれど、私と彼がいわゆる『深い仲』になったのは、殆ど奇跡の出来事に近い。

それは私にとつても予期せぬ出来事だった。

季節は夏。

ネット掲示板で知り合つた趣味仲間から教えられた、とあるコミニティーサイトがきっかけだった。

招待制のそのサイトへ登録をし、趣味仲間を着々と増やしていたとある日。

突然、見ず知らずの人からメッセージが届いた。

『貴女が好きなアーティストのKさんがお忍びで飲みに来る店を知っています』

そんな、短いメッセージだった。

メッセージの送り主のプロフィールを見ても、どこにも接点がない。

趣味も、仕事も、登録しているコミュニティの内容も。

始めは、イタズラかと思つた。

いや、イタズラだとしか考えられない。それが第一印象だった。

無視しようかと思つたけれど、嘘でもいいから…知りえる情報ならどんなものでも知りたいと思つた。そんな逡巡を繰り返し、2日が経過した。

思い切って、メッセージを返信することにした。

イタズラでもいい。嘘でもいい。情報のひとつとして、得ておう、と前向きに考えてのこと。

今から思えば、この決断がなぜできたのか。一時の気の迷いだったのかもしれない。

しかし、その決断は、間違いではなかった。

返信の返信が届いたのは、3日後。

やはり短く

『T線沿線 M 駅前にある”S”という店です』

と、殆ど伏字だけのメッセージ。

知りうる限りで沿線、駅名を調べあげ、お店を絞り込むのに10日かけた。

絞り込んだ店名をメッセージすると、翌日

『ビンゴです』

と、矢張り短く返信があった。

胸が高揚した。

本当に？

彼は本当に来るのだろうか。私はメッセージの相手にかかわれているのではないのか。

悩みながら、店へ行くことを躊躇った。

やはり、悪質なイタズラだ。

そう思ったが、メッセージの送り主から別のメッセージが届いた。

『実は、その店の経営者とは昔からの知り合いで、自分もよく来店します。この一年で彼とは十回程会いました』

そんな内容のメッセージ。

文面から読み取れた誠実さを信じ、メッセージのやり取りを何度か繰り返し、その情報が嘘ではないという確信へと変化させたのは、最初のメッセージから1ヶ月以上が経過していた頃だった。

なんの接点もない相手からの突然降って湧いたような情報。

まるで爆弾を抱え込んだような緊張感が、夏の間、私を支配して

いた。

そして、来店を決めたのは、茹だる様な暑さがいつまでも消えない、初秋での出来事。

自分の誕生日を記念に、行ってみようと覚悟を決めた。

場所は、地図で調べてあった。

下見もしてみた。

しかし、店構えからやはり、あの情報は偽物では、という思いだけが募った。

擦り硝子の扉の、冴えない雰囲気の漂う店。

ここに本当に彼が来るのか？

その思いが強すぎて、情報を信じることは出来なかった。

私は悩みながら決意し、そして……。

扉を開ける。

店内は、店構えと同様に寂れた印象が強かった。

客が来る気配が感じられない、冴えない設え。カウンターに並ぶスツールは6。

4人掛けのテーブルが2セット。これだけの、狭い店内。

壁には、黄ばんだ品書きが、所々剥がれた状態で並んでいる。

しん、と静まり返った店内。

「いらっしやい」

店の奥から現れたのは、多分店主兼コック。

店同様に、やはり冴えない印象がぬぐえない。

「お一人？」

「……あ、はい」

「じゃあ、ここ、座って」

カウンターの一席を示されて、おずおずと座る。しばらくして、お絞りと水が出される。

適当にメニューを頼むと店主は姿を消した。奥の厨房で調理をする物音がする。

所在なげに私は、ただ、店内を見渡しながら、どうしようもない不安な気持ちのまま時間がたつのを待った。

(やっぱり……イタズラだったのかも)

失礼ながら、こんな寂れた、冴えない店に、彼が来る訳がない。やはりからかわれたのだろう。もっともらしい嘘について。

本名も顔も知らない、文字だけのやりとりしかない人間の言うことを真面目に受け取ってはいけないのだ。

今後は気をつけよう、今日のことを教訓にしよう。

そう自分に言い聞かせ、注文したメニューを食べたらさっさと帰ろう。そう決めた。

かなりの時間、待っていたと思ったが、時計を見て確認すると10分程度だった。あまりにも時間がゆっくり流れるので、もっと長い時間が経っているのかと思っていた。

店主は、注文したメニューをテーブルに置くと、また姿を消した。気まずいまま、食事をする。味も分からなかった。

と、その時。

静かに扉が開いた。

扉の影に隠れるように店内へ入ってきたのは…彼。

ラフすぎる格好で……それは、ライブのステージやテレビでは絶対に見られないような姿だった……ふらりと、立ち寄った、という表現がぴったりくるような雰囲気で、気取ることもなく、気負った感じもなく店内に入ると、ちらと私を見、そして何も言わず、当たり前のようにカウンターの席のひとつ、私の座っている席のひとつ

空けた隣に座った。

(本当に…来た)

嘘ではなかったのだ、という思いと、あまりにも普段着のラフさで訪れた、彼のギャップで、頭の中は真っ白になっていた。

奥から店主が現れる。彼の姿を認め破顔した。

「慶司^{ケイジ}くん、久し振り。元気だった？」

明らかに常連客に対する接し方で店主は彼に向かって声をかける。

「うん」

対する彼も、気さくな態度で応じる。

「今日は何にする？」

「…なににしようかな。おススメは？」

「じゃあ、適当に作るけど、それでいい？」

「うん」

何気ない言葉のやり取り。それでも確実に彼がこの店を頻繁に利用しているのは、よく分かった。

店主は「じゃあ少し待って」と言い置くと厨房に姿を消す。

その背中を見送ると彼は、おもむろにポケットから携帯を取り出した。

凝視することも出来ず、横目でチラチラと様子を伺うようにしながら私は、更に味が分からなくなったオムライスを口に運ぶ。

もう、どうしていいか分からない。

考えは纏まらず、ぐるぐる駆け巡るか、耳から抜け落ちていくような感覚。

『頭の中が真っ白になる』なんて、陳腐な表現方法だと思ってい
たけれど、本当に真っ白になるんだ…などと、とりどめもない、意
味もないことしか思考に浮かばない。

更には、真っ白になるのは頭の中だけでなく、目の前ものだな、
と、また意味のないことを内心で思っていたとき。

「君…ひとり？」

彼が私に向かって呟くようにそう言った。

(眩暈がする……)

何も考えられない。

ならばいっそ…流れに任せてしまえ。

歓喜を通り越して自暴自棄な気分で、私は彼を正面から見据えた。

*

*

*

はつきりと意識を取り戻したとき、そこは見知らぬ場所だった。見慣れぬ天井の壁紙をぼんやり眺め、自分がいる場所が何処で、いままで何をしていたのかを気だるい意識で考え始めた。

(彼に…ケイジに…… 本当に会えたんだ)

まず思い出したのはそれ。

胡散臭いと思いつつも、一縷の望みをかけて赴いた店で。

ウソだと思いつつもウソだと断言することもできないで、わずかながらの勇気を振り絞って足を運んだその日に、本当に彼に会えたんだ。

その喜びが、まず思い出された。

目を閉じて、その喜びを噛み締める。そして反芻する。

薄暗い店内。寂れた印象が拭えない、冴えない雰囲気漂う店。

華々しい彼には不似合いだと思っていたその店に、気軽に…まるで溶け込むようにして馴染んだ”普段着”の彼。装わない素顔の彼は、ライブで見るより、テレビで観るより何倍も素敵だと感じた。

常連客の一人として、当たり前のようにカウンターの一席に座っていた彼が私に声を掛けたのは、約束の相手(多分女性だろう)が来られなかったから。

携帯画面を見つめて溜息交じりの吐息をついた姿が目には焼きつい

ている。

どこことなく警戒心を含む声色で「君……ひとり？」と尋ねた表情が忘れられない。

疑うような、暴くような…なのに、どこか甘えたような。

複雑な感情が絡み合う色の瞳を真正面から見据えた途端、もうすべてがどうなつてもいいと真剣に思った。

なんと答えたかは覚えていない。もしかしたら軽く頷いただけだったかもしれない。

しかしその答えがあつたからこそ…そしてその答えが彼の意に沿つていたからこそ、今こうしているのだということには理解できた。

夢のような…というより奇跡的な、としか形容できない、突然の出来事。

思い出すだけでも体が震える。

……目を開き、もう一度見慣れぬ天井を見つめ、そして緩慢な動作で首を巡らせた。

横たわる剥き出しの背中。初めて見る彼の素肌。

滑らかな褐色の肌をぼんやり瞳に映すと、意味もなく涙が溢れた。

そう。

私は出逢つて数時間で彼と関係を持ったのだ。

そして今、ベッドで横になつている。

そう、はっきり理解できたところで、私はまた困惑した。

彼が目覚める前に帰ってしまおうか、それとも彼が起きるのを待とうか。そう悩んでいたとき、

「ん……」

僅かに呻いて、彼は寝返りを打った。そしてゆっくりと目を開く。肌の色によく似た褐色の瞳はまだ焦点を結んでいない。

ぼんやりと私を見つめ……そして焦点が合わさった瞬間、視線は

鋭いものとなった。

「……誰？」

開口一番、かすれた声で彼は言う。

その言葉に私はなんと答えていいか分からなかった。名乗ったところで彼は知る由もなく、かといって貴方のファンです、と告げる気にはならなかった。

「……いいや。誰でもいいから……冷蔵庫から水、とってきて」

答える前に、気怠い声でそう言って、彼は上半身を起こす。

「喉、渴いてんだ」

私は黙って彼の言葉に従った。

体を起こし、タオルケットを体に巻きつけて、パーティションを横切り、わずかに温んだフローリングのダイニングへ向かうと、冷蔵庫の扉を開く。

中身は殆ど空に近かった。

ペットボトルのミネラルウォーターを取り出して扉を閉め、コップを探したけれど見当たらず、ペットボトルだけを持ってベッドルームに戻る。

彼は煙草をふかして待っていた。

「コップ見当たらなかったの……」

そう言いながらミネラルウォーターを差し出すと、黙って受け取った。灰皿に煙草を押し付け揉み消し、キャップと取るとそのまま口をつけ、喉を鳴らして一気に飲み干す。

そして大きく息を吐き出すと、短くサンキュ、と呟いた。そして、立ち尽くしている私に、ベッドに腰掛けるよう言って、

「さっきはゴメン」と小声で言った。

「寝起き悪くて……」

そう、弁解するように言った彼はまるで、イタズラを見咎められた子供のようにあどけない。どう返事をしていいかわからず、私はぎこちない笑みを返すしか出来なかった。

「……もう一度聞くけど。君、誰？」

「昨日『ソラシド』にいた客です」

わずかな間悩んだ末、私はそう言った。いや……それ以上のことは言えなかった。

彼はその言葉に逡巡した素振りを見せ……そして眉間に皺を寄せて考え込む仕草をした。

「もし君が……」

……ずいぶんと長い時間（と、私は感じた）沈黙していた彼は、不意に呟く。

「もし君がオレの素性を知らないなら、一度限りだとお互い割り切りたいけれど」

そこで言葉を区切り、また黙り込む。

「そうでないなら……」

「そうでないなら？」

「他言しない、という条件で君の気の済むまでこの関係を続けよう。ただし」

また言葉を区切る。その表情は真剣そのものだった。

ステージに立った瞬間の表情だ、と私は密かに思う。

「もし君の気が済んで関係が断たれることになった時も、他言してはいけない。その代わり……」

私は言葉を待つ。待つことしか出来ない。

「その約束さえ守るならオレは……いや、オレからはこの関係を断つことはない。ただひとつだけ言っておくとすれば、オレから関係を断つことがないという以上の期待はしないで欲しい。言葉の意味は、わかるね」

そこまで一気に話をすると、彼は煙草に火をつけた。この1本を吸いきるまでに返答をしなければならぬのだろう。

吐き出された紫煙は不思議な形を描いて、ゆっくりと部屋に霧散していく。それを眺めながら私は、どちらかを選択しなければならぬことに焦りを感じていた。

（私は……どうしたいの？）

一夜の出来事を心の奥にそっと秘め、宝物のように大事にしている、と思う気持ちと、いや、もっと彼に愛されたい、と願う気持ち。その相反する気持ちが何度も私の中で行き来する。

煙草はもう半分以上が灰と化した。

答えなければならぬ。

意を決して、私は息を吸い込んだ。

そして……。

彼との関係は始まった。

つい先日のうだるような残暑は、気がつけば初秋の霽圀氣に変貌していた。

頬に当たる風には、わずかに冷気を含む。

彼 日本でも有数のロック・アーティスト、篠乃宮慶司しのみやけいじと初めて関係を持つてから、早半月を過ぎ……そして関係は、まだ続いていて。

彼とは、多いときで週3回、会っている。

彼から求められることもあれば、私が求めて会うこともある。それは概ね半々の割合だった。

連絡はいたってシンプルだ。

携帯に、会いたいときに互いにメールをする。それだけ。

都合が悪ければ返信が来る。返信が来なければOK。

メールでのやり取りすらも、必要最低限に抑えられている。

それでも私には、このメールアドレスがたったひとつの希望、命綱のようなものだった。

*

*

*

連絡先、教えてくれる？

関係が続ける、と答えた私に彼はそう言った。

3本目にあたる煙草を啜えながら、素っ気無い声で彼は言ったのだ。

服を身に着けていた手を止め、私は彼を見つめる。

名刺、渡しでしょうか？

力チリ

物静かな室内に、ライターを点ける音がやけに大きく響いた。

……ケイタイのアドレス書いてある？

はい。

じゃあそれでいい。

言つと、彼は深く紫煙を吸い込んだ。溜息交じりでそれを吐き出す。

衣服を身につけ終え、簡単に身支度を整えてから、私は鞆の中から名刺入れを取り出し、その中の一枚をサイドボードに置いた。

名刺を一瞥することもなく、彼は煙草をふかしながら

必ず連絡するから

短く言つと、それですべての用件は終わった、というように背を向けた。

私はその背中に軽く会釈をし、彼の部屋を後にする。

セキュリティが万全なマンションのエントランスを抜け、外へ出た。

……外は午後の微眠の中だった。

気怠い雰囲気か漂う住宅街を抜け、駅へ向かう。

昨日入った店とは、徒歩で5分もかからない距離だった。

わずかにざわめく駅前の商店街を抜けて駅へ着くと、緊張の糸が切れたのか、膝がガクガクと震えていた。

その後、どうやって帰宅したか覚えていない。

殆ど無意識で電車を乗り換え、帰宅していた。帰宅後も、虚脱感に襲われた。

あまりにも現実離れしすぎた現実が身の周りに起きたせいか、思考能力は完全になくなっていた。

もしかしたら……夢だったのかもしれない。
そう考えるようになったのは、翌日の仕事の準備をしていたときのこと。

ああ、また明日から仕事が始まる……と憂鬱な気分を味わいながら着ていく服を選びつつ、たった2日前の出来事が嘘のように思えてきたのだった。

それを打破したのは、
現実だと認めざるを得なくなったのは、
1通のメール。

消音にしていた携帯がテーブルの上で小刻みに震え、メールの着信を告げる。

メールを確認すると、件名に『篠乃宮です』とあり、本文にはただ短く『これが僕の連絡先です』とあった。

(本当だったんだ…夢じゃ、なかったんだ……)
まず真っ先に思ったのは、それが現実だったということに対する驚き。

夢ではなかったという事実を、この1通のメールは確実にしてくれたのだ。

……携帯を持つ手が震えるのが、自分でもわかった。次いで膝も震えてくる。

震えは次第に、全身に渡った。

私は何度も携帯の画面を見返した。何度見ても文面は変わらない。その当たり前のことに私はようやく、先日の出来事を現実として受け止めることができたのだった。

震える手で、返信をする。

一文字一文字、とても時間をかけて『メールありがとうございまして』とだけ入力し、送信をした。

しばらくして、やはり短く『明後日の夜ウチに来てください』とメールが送られてきた。私は了承する旨の返信をするのがやっとだ

った。

(どうしよう……)

メール送信のボタンを押してから、私は事の大きさに愕然とし始めた。

本当のことだったという驚き、喜び。

体の震えは止まらない。私はしばらくの間、ずっと携帯の画面を見続けていた。

*

*

*

2日後。

私は再び彼のマンションを訪れた。

駅の改札を通り、商店街を抜け、閑静な住宅街の奥まった場所に彼の住むマンションはある。高級そうな…とはわずかに言い難い、ごく普通の15階建てのマンション。

その最上階の角部屋が彼の部屋だった。

エントランスに入り、インターフォンで彼の部屋番号をプッシュすると、くぐもった声で応えの声があった。

「私です」

名乗ろうかと悩みつつ、それだけを言うと無言が返り……。静かに眼前の自動扉が開く。エレベーターに乗り、15階に着くと角部屋までの廊下はとても長く感じられた。

静まり返った廊下に、私の靴音だけが響く。

部屋番号を確認し、インターフォンを鳴らすと少しの時間の後、扉が開かれた。

わずかに開いた扉の奥で、長身の彼が顔を覗かせる。その、何気

ない仕草を見て心なしか気分が和んだ。

「入って」

短く言うと更に扉を大きく開く。

「お邪魔します」

扉の隙間に体を滑り込ませるようにして私は室内へ上がりこんだ。

部屋の中は、2日前に訪れたときとさほど変化はなかった。

わずかに籠った空気に混じる煙草とアルコールの臭い。

「なにか飲む？」

「………お構いなく」

「そう。適当に座って」

ソファを指し示して促され、私はソファに腰を降ろす。

「とりあえず………コレ」

向かいに座った彼が徐にテーブルに載せたのは、鍵。

問う前に煙草に火を点け、一服をはじめてしまったその顔を私は凝視した。

(合鍵………ってこと、かしら?)

そうとしか考えられなかった。

深く紫煙を吐き出してから彼は言う。

「一昨日はちょっと冷たい態度ですまなかったと思ってる。どういった経緯であれこういうことになったのは………割り切りの関係も必要だけれど、できる限りで誠意を見せておきたいと思ったから、渡しておく。これからはコレを使って入ってきて。一応マネージャにも話してある。あまりいい力才はされていないと思うけれど特に何も言われなかったから問題ないと思う」

そこまですを一気に言うと、残り少なくなった煙草を軽くひとさしし、灰皿に押しつけるようにして揉み消した。

「………」

どう反応していいかわからなかった。

「ありがとうございます」

そう返事をして鍵を受け取り、その場でキーホルダーにつけた金属の触れ合う冷たい音が耳に響く。

「連絡して、OKなら勝手に部屋にあがってくれて構わないから」
「わかりました」

キーホルダーを鞆の中に収めながら私はそう返事をして、それからどうしていいかわからず、所在なげにただ、部屋を見回すことしかできなかった。

……締め切ったカーテンから漏れるわずかな光。

灰皿から立ち昇る紫煙と、煙草の臭い。

(それで……どうすれば……?)

私には、どうすればいいのかわからないことだらけだった。

そもそも今日の前で起きていることが現実として認識できずにいる部分が多い。性質の悪い夢でも見ていると思ったほうが気分が楽だと思える程の珍事。

『事実は小説より奇なり』という言葉がこれほどまでにしっくりくることはない、というような出来事だった。

「……どうする？」

突然囁かれた言葉の意味が私にはわからなかった。

「先にシャワー浴びる？」

意を察し、私は頷いた。

一度転がった石は、どこまでも転がり続ける。

そう、感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9500e/>

LOVELESS x True Love

2010年10月10日01時17分発行